



史傳

津崎矩子

(つづき)

下村三四吉

「太平のねむりをさます上喜撰(○蒸)漁船、たつた四杯
 で、夜もねられず」との狂歌は、米艦初度の渡來
 の頃作られしものなるが、これによりても、當時
 の情狀想ひ見るべし。幕府は、米國使節の齎せる
 國書を久里濱にて受取り、その返答を、明年正月
 長崎に於いて與ふべきことを約しぬ。米艦は、來
 春の再來を約して、去れり。然るに、その翌月に
 は、「ロシア」の軍艦亦長崎に來りて、交易の事及
 び樺太島の境界を定むることを請求したり。幕

府は、これに對しても、兩三年の後に返答すべし
 との旨を申し渡しして、引きかへらしめき。かゝる
 騒ぎの中に、時の將軍家慶は永眠に就き、子家
 定立ちて、第十三代の將軍となりぬ。

翌くれば、安政元年正月、上下なほ屠蘇酒の醉
 もさめやらぬに、米國の使節「ペルリ」は約を履み
 て、再び浦賀に來り、去年の返答を促しぬ。こゝ
 に於いて、貿易はなほ許さざりしかど、和親の條
 約は結ばれたり。ついで、魯、英、蘭の三國とも
 同様の和約成れり。鎖港、攘夷の論これより漸く
 天下に盛んなり。

この時に當りて、諸侯中、水戸、越前、佐賀、
 土佐及び薩摩等には、各々賢明の君ありしが、殊
 に薩州の島津齊彬は、その識見その力量最も勝れ
 隠然として重望を負へり。幕府の大老阿部正弘も

夙に齊彬の偉人なることを察し、これと相結びて
 幕政を整理し、以てこの内外多難の際に處せんこ
 とを欲したり。これが爲め、齊彬の女を以て將軍
 の御臺所となさんと議起り、將軍もこれを許さ
 れき。乃ち、島津氏の一族島津安藝の娘篤子を養
 ふて齊彬の子とし、更に之を近衛忠熙公の養女と
 なし。幕府に入興せしめぬ。初め家定は、鷹司輔
 熙の女を娶りしが、嘉永元年逝去せしかば、更に
 一條關白の女を娶りしに、これも亦世を早ふし、
 こゝに至りて、篤子入りて御臺所となりしなり。
 時に安政三年十二月にして、篤子年十八、後に天
 璋院と稱せしは、この夫人なり。さて、篤姫の入
 興につきては、齊彬の臣にして後年明治維新の元
 勳たる西郷隆盛、命を承けて、専ら周旋の任に當
 りけるが、内部諸般の細事は、村岡、すべて後見

しまゐらせけり。而して、後に村岡が國事に關し
 て大に隆盛のために盡すところありしは、一は、こ
 の事より、互に深く相知るに至りしためならん。
 かくて、篤姫の入興は滞りなく濟み、これまで
 とかくに關係の圓滑を缺きたりし幕府と九州の一
 大雄藩との和合は事實上にあらはれ、上下共に心
 あるものは、よろこび合へりき。しかも、この際
 二大問題は、眼前に横はりて、その解決を待てり
 他なし、一は將軍の養君問題にして、一は、外交
 問題なり。余は、こゝにこの紛糾せる問題の詳
 細につきて叙述するの邊なしといへども、後に記
 すべき村岡の事蹟を知るの豫備として、その大要
 を語らしめよ。

右の二問題は、一は内事に屬し、他は外事にし
 て、兩者相異なる性質を有すること勿論なれど

當時に在りては、互に關聯せる問題にて、これがため非常に事情の錯雜を生ぜりき。

篤姫入輿の年 七月、米國の總領事「ハルリス」下田に來り、從來の修交和親の外に、通商貿易を請ふの國書を携へ、江戸に入り將軍に謁して之を呈せんことを求めぬ。幕府は天下の物議を憚りてこれを拒みけれど、「ハルリス」固く執りて屈せず遂に翌安政四年十月に及びて「ハルリス」は登城謁見、國書捧呈の事を終りき。幕府も「ハルリス」が演述せし當時世界の犬勢に鑑み、且はその切なる要求を呑み難く、井上岩瀬の兩全權委員をして「ハルリス」と商議せしめ、數回の談判を重ねて、その十二月二十五日に、通商條約の草案十四箇條を議定し、京都の勅許を得て安政五年三月五日を以て調印すべきことを誓約せり。

この時まさに篤姫入輿の事に盡力されし大老阿部正弘は、既に病歿し（安政四年六月）、堀田正篤その跡を承けたり。正篤は、右の通商條約の草案の勅許を得んために、使者を京都に上せて、その事を請ひ奉りき。然るに、朝議は開港を非として攘夷に決し、一方にては、水戸藩は攘夷論の中心となりて、京都と連絡を通じたれば、幕府の使者は、要領を得ずして、空しく歸りぬ。こゝに於いて、堀田大老は、安政五年二月自ら京都に赴き、諸公卿の間に周旋して、條約勅許の執成を請ひけれど、これもまた不成功に終りき。而して、堀田大老が未だ歸府せざる間に、早くも「ハルリス」に條約の調印を約したる三月五日は來りぬ。大老は四月二十日に歸府したれども、調印をなすこと能はず「ハルリス」の督促は益々迫れり。

時勢かくの如くなりしを以て、將軍の養君問題
は、これと相關係して、頗る重大なる事端を誘き
起せり。養君問題につきては、これを次節以下に
述べんと欲す。

(つづく)

我をわれさしるしめすかやすめらぎの

玉の御聲のかゝる嬉しさ

晴間なく空に雲そう五月雨に

軒端の梅に實さへこぼるゝ

ひえの山見おろす方ぞ哀なる

いま九重の敷したれば

大君に捧げ奉りしわが命

今こそ捨つる時はきにけり



文苑

はるごめ會連句

ろすゐ

つばき

露を命の

玉つばき

雪のかるなを

さしのべて

からんとすれば

一トしづく

落るは花の

涙かも

すみれ

ゆかしの色よ

濃紫

君が送りし

靈すみれ